福田亘孝・西野理子編 2011.09
第3回家族についての全国調査(NFRJ08)第2次報告書 3『家族形成と育児』
日本家族社会学会全国家族調査委員会

子どものしつけに影響を与える家族の要因

山岸　貴子
（北里大学大学院看護学研究科）
小林　奈美
（北里大学看護学部）

【要旨】
目的：育児困難を予防する保健師の子育て支援のために、「子育て」という観点から、しつけの様態に影響を与える家族の要因を明らかにする。方法：NFRJ08 回答者の 28 歳から 47 歳の有配偶者で子どもがいる男女 1387 名を対象とし、得点化した「しつけの様態」を従属変数、「家族機能」「家族観」「夫婦関係の評価」「生活状況の評価」「心身の健康状態」「サポートネッワーク」の項目を独立変数として、相関分析と重回帰分析を行った。さらに、力に頼るしつけ、子どもへの共感を意識していないしつけを行うことが「よくある」と回答した者について、独立変数の項目との関連を分析した。
結果：「しつけの様態」と、「本人の年収」「家族観」「サポートネットワーク」との間に相関はなかったが、他のいくつかの独立変数の項目との間には相関があった。重回帰分析では、モデルは「CES-D 得点」(P<.001)「配偶者との会話時間」(P<.01)「子どもが 3 歳くらいまで母親は子育てに専念すべきだ」という「家族観」(P<.05)からなったが、「しつけの様態」を十分に説明できるものではなかった。また、力に頼るしつけ、共感を意識していないしつけをよく行う者に関して、特徴的な傾向はみられなかった。
考察：今回、独立変数としてあげた要因以外にしつけの様態を説明する因子がある可能性がある。力に頼るしつけ、共感を意識していないしけを行う者は、そのしつけに価値があるという認識を持ち、さらに家族間でも共有されている可能性がある。しつけという行為のみを捉えるのではなく、しつけに対する家族全体の認識を確認することが、育児困難予防のための子育て支援につながると考える。

キーワード： しつけの様態、子育て、育児困難予防

１．はじめに

我が国の少子化対策である「健やか親子 21」にもとづいた子育て支援の取り組みは、育児困難予防と早期発見を目標にしているといっても過言ではない。子育て支援は、様々な機関や専門職により行われており、なかでも、子育て支援に関わる地域の看護専門職である保健師は、母子保健活動における子育て支援としてポピュレーションアプローチを行い、同時にケースアプローチとして家庭訪問を行える数少ない職種であり、育児困難の予防と

早期対応ができる立場にある(有本 2007)。

保健師とは、保健師助産師看護師法で「厚生労働大臣の免許を受けて保健師の名称を用いて保健指導に従事するものである」と定義されている。活動の対象は、ライフステージ、健康度、生活の場、支援を自ら求めるかを問わず、すべての地域で生活する人であり、心身の健康の維持、増進の動機付けや、心身の健康に関連した個人、家族、社会に影響を与える問題に対して、またその発生を予防するめに保健指導もって看護支援を行うものである。その活動単位は、一個人から家族、そして近隣者を含む地域社会であるため、時代によって変化している個人や社会や、またそれらを土台にしている現代家族の状況を把握することが必要不可欠なのである。

保健師が行う子育て支援は、乳幼児健診、養育者からの相談、母子健康手帳交付などの届出という場面から始まり、家庭訪問のような個別、乳幼鵜児健診や子どもの発達や母親のエンパワメントを利用するグループのような集団でのなどの方法を単独、または組み合わせて利用し、多様な子育て状況のなかで、育児不安や育児困難観のある、またその可能性のある家族に対して、夫婦自らがお互いに調整し実現できる具体的な支援を提示していくことである。

では、支援する「子育て」とは何なのか。発達の過程にある子どもが、家族の一員として、社会の一員として生きていくために必要不可欠な世話としつけを行うことである(上田 2009)。しかし、必要不可欠であるにもかかわらず、特にしつけという養育態度は、その程度によっては子どもを心身共に傷つけ、その潜在的なリスクとなっている可能性もある。

しつけという行為は日常生活の中で繰り返される養育者の養育行為に関することであり、家族形態や家族機能、家族間の関係性や家族員の心身の健康などとの関連性を理解することによって、アセスメントや個別的で具体的な支援が可能となり、育児困難予防と早期対応に繋がるのである。つまり、「子育て」の観点から検討することが必要なのである(上田 2008)。

しかし、現在の子育て支援は、育児困難となった養育者や家族の要因をもとに、リスクを持つ対象者をスクリーニングするが、その後の具体的支援に結びつきにくいという課題がある（上田 2009)。そして、養育態度に焦点あてた調査や研究は、一定の居住地域でのコホート調査や、養育者や子ども年齢の限定されたものはあるものの限られており(上田 2008; 賀数 2009; 金谷 2006; 西嶋 2010)、叩く、しめ出すなどの力に頼るしつけ、無視する、子どもへの共感を意識していないしつけを行う対象者に関して、家族機能、関係性や心身の健康状態との関連性に検討したものも少ない。

そこで、しつけの様態に影響を与える家族の要因を明らかにし、具体的な看護支援を検討するために、①しつけの様態と家族機能や役割意識、養育者の身体的・精神的健康との関連を分析し、そして②育児困難が結びつき易いしつけを行う家族の家族機能や役割意識、養育者の身体的・精神的健康に関して特徴的な傾向を把握することを目的とする。

２．用語の定義

育児困難：家族形態や環境、家族機能、関係性、家族観、心身の健康状況や子どもの発達などが連関して生じる何らかの理由によって、療育者または家族が、育児において、必要な世話やしつけが困難となり、世話ができない、子どもの心身を傷つけるなど、子どもを含めた家族全体への支援が必要な状況をいう(岡本 2010)。

３．方法

3.1 分析の対象者

NFRJ08 の調査項目や質問の内容から検討し、28 歳から 47 歳で有配偶者、子どもがいる男女とした。

3.2 分析方法

1)「しつけの様態」を従属変数として、「家族機能」、「家族観」、「夫婦関係の評価」、「生活状況の評価」、「心身の健康状態」、「サポートネットワーク」に関する項目を独立変数として、スピアマンの順位相関係数を用い相関分析、重回帰分析を行う。家族としての関連性として検討するため男女区分しての分析は行わない。

従属変数：

「しつけ」の項目を得点化し、＜話かける＞＜気持ちを理解する＞の 2 つの項目は逆転項目として合計したものを「しつけの様態」とした。＜無視する＞＜叩く＞＜閉じ込める＞＜傷つくことを言う＞の項目に「よくある」、＜話かける＞＜気持ちを理解する＞の項目に「まったくない」とすべて回答すると合計 6 点となり、得点が低いほど力に頼るしつけ、子どもに共感しないしつけであるということになる。

独立変数：

・「家族機能」は、＜本人年収＞＜会話時間（平日）＞。

・「家族観」は、「家族意識」の項目＜性別分業＞＜母親育児＞＜性別役割＞。

・「夫婦関係の評価」は、「夫婦関係」の項目＜心配ごとや悩み事を聞いてくれる＞＜能力や努力を高く評価してくれる＞＜助言やアドバイスをしてくれる＞と、「満足度」の項目＜子育てに対する取り組みについて＞＜家事に対する取り組みについて＞＜夫婦関係全体について＞。

・「生活状況の評価」は、＜生活満足度＞と、「悩み・負担感」の項目＜家族に理解されないと感じる＞＜家事・育児・介護の負担が大きすぎると感じる＞＜家計の先行きについて不安を感じる＞。

・「心身の健康状態」については、＜本人の健康状態＞の項目と、「CES-D 尺度」は、

うつ病自己評価尺度であり、16 個のネガティブ項目と 4 個のポジティブ項目からなり、合計点 16 点以上がうつ状態が疑われるというものである。この調査の項目は、16 個の

ネガティブ項目に対して項目分析を行い、内的整合性を低めていた 4 項目を除外して残りの 12 項目の合計得点を指標としている(稲葉 2001)。そこで、「毎日が楽しい」というポジティブ項目を逆転項目として合計したものを＜CES-D 得点＞とした。11 の項目に「まったくない」、1 つの逆転項目に「ほとんど毎日」と回答すると合計 12 点となり、得点が高いほどうつ傾向が強くなるということになる。

・「サポートトネットワーク」の項目＜精神的＞＜金銭的＞＜人手＞。

2)「しつけ」の項目で、＜無視する＞＜叩く＞＜閉じ込める＞＜傷つくことを言う＞で、「よくある」、そして＜話かける＞＜気持ちを理解する＞の項目で「まったくない」と回答した対象者について、「年齢」「性別」「最終学歴」「現職の有無」「職種」と、「家族機能」、「家族観」、「夫婦関係の評価」、「生活状況の評価」、「心身の健康状態」、「サポートネットワーク」に関する項目を分析する。

４．結果

4.1 対象者の概要

対象者の 28 歳から 47 歳（若年）2191 名中、有配偶者で子どもがいると回答したのは 1387 名（63.3%）、うち男は 598 名、女は 798 名であった。対象の属性として年齢、学歴、就業の状況、職種、本人の収入は表 1 に示す（表 1）。

また、「CES-D」の得点は、最低点が 12 点、最高点が 48 点であり、平均得点 18.34(SD±5.03)であった。「しつけの様態」の得点は、最低点が 11 点、最高点が 24 点であり、平均得点 21.34(SD±2.12)であった（表 2）。

表1　対象者の概要

	N=1387
性別	
男	589 (43.1)
女	789 (56.9)
年齢	
28～29歳	70 (5.0)
30～34歳	245 (17.7)
35～39歳	401 (28.9)
40～45歳	485 (35.0)
46～48歳	186 (13.4)
本人学歴	
中学校	29 (2.1)
高校	591 (42.6)
専門学校	214 (15.4)
短大・高専	212 (15.3)
大学	297 (21.4)
大学院	27 (1.9)
その他	5 (0.4)
無回答	12 (0.9)
就業状況	
ついている	1077 (77.6)
休職中	20 (1.4)
過去についていた	280 (20.2)
ついたことはない	2 (0.1)
無回答	8 (0.6)
職種	
専門・技術系	275 (19.8)
管理的職業	48 (3.5)
事務・営業	410 (29.6)
販売・サービス	310 (22.4)
技能・労務・作業	312 (22.5)
農林漁業職	14 (1.0)
その他	1 (0.1)
非該当	10 (0.7)
無回答	7 (0.5)
本人収入	
収入はなかった	212 (15.3)
100万円未満	273 (19.7)
100万円～129万円台	75 (5.4)
130万円～199万円台	57 (4.1)
200万円台	117 (8.4)
300万円台	137 (9.9)
400万円台	135 (9.7)
500万円台	118 (8.5)
600万円台	87 (6.3)
700万円台	59 (4.3)
800万円台	38 (2.7)
900万円台	17 (1.2)
1000～1199万円台	24 (1.7)
1200万円以上	11 (0.8)
無回答	27 (1.9)

表2「CES-D」得点と「しつけの様態」得点

	「CES-D」得点	「しつけの様態」得点
N	1360	1363
最小値	12	11
最大値	48	24
平均値	18.34	21.34
SD	5.03	2.12

表3 しつけに影響を与える家族機能、夫婦の関係性の相関係数（スピアマンの順位相関係数）

		（満足感）			（家族観）			（悩み・不安）			（夫婦間にあてはまること）				
	配偶者との会話時間	子育てに対する取り組み	家事に対する取り組み	夫婦関係全般	男は外で働き、女は家庭を守るべき	子ども3歳まで母親は家庭を守るべき	家庭を養うのは男の役割	家族に理解されない	家計の悩み	育児・介護・家事の負担大	悩みごとをきいてくれる	能力を評価してくれる	助言・アドバイスをくれる	本人健康状態	生活全体満足度
本人収入	−.004	−.262***	−.043***	−.178***	.018	−.031	−.036	.106***	.176***	.309***	−.033	−.126***	−.014	−.043	−.082**
配偶者との会話時間		−.241***	−.158***	−.326***	−.006	.025	−.024	.218***	.074**	.130***	−.389***	−.321***	−.387***	−.088**	−.205***
子育てに対する取り組み			.692***	.641***	.066**	.023	.052	−.349***	−.209***	−.347***	.450***	.431***	.425***	.126***	.333***
家事に対する取り組み				.566***	.077**	.066*	.074**	−.310***	−.210***	−.374***	.391***	.395***	.380***	.087**	.283***
夫婦関係　全般					.055*	.038	.041	−.393***	−.243***	−.315***	.545***	.535***	.516***	.163***	.438***
男は外で働き、女は家庭を守るべき						.531***	.540***	.038	−.051	−.074**	.056**	.037	.014	−.005	.109***
子ども3歳まで母親は家庭を守るべき							.497***	.019	−.009	−.058*	.035	.011	−.020	−.013	.009
家庭を養うのは男の役割								−.013	.028	−.069*	.042	.019	.022	−.010	−.007
家族に理解されない									.343***	.516***	−.356***	−.350***	−.297***	−.190***	−.297***
家計の悩み										.370***	−.161***	−.214***	−.168***	−.221***	−.444***
育児・介護・家事の負担大											−.218***	−.245***	−.191***	−.197***	−.278***
悩みごとをきいてくれる												.675***	.706***	.106***	.293***
能力を評価してくれる													.633***	.108***	.323***
助言・アドバイスをくれる														.099***	.310***
本人健康状態															.339***
生活全体満足度															
CESD															
問題、落ち込み、混乱相談相手いない															
急いでお金をかりる相手いない															
人手が必要なとき誰もいない															

(*P<.05, **P<.01,***P<.001)

4.2 しつけの様態と関連する要因

スピアマンの相関順位係数を用い相関関係を分析した結果、本人の年収、家族観、サポートネットワークとの間には相関がなかった。しかし、「しつけの様態」と相関のみられたいくつかの独立変数の項目との間には相関があった（表 3）。

重回帰分析（ステップワイズ法）を行った結果、「CES-D 得点」（P<.001）、「配偶者との会話時間」(モデル 2 では P<.05、モデル 3 では P<.01)、「子どもが 3 歳くらいまで母親は子育てに専念すべきだ」(P<.05)という「家族観」(P<.05)が有意であったが、R2 乗値は、モデル 1 が.037、モデル 2 が.041、モデル 3 が.044 であった（表 4）。

表4 しつけの様態に影響を与える要因

N=1339

	しつけの様態		
	モデル1	モデル2	モデル3
CES−D得点	−.191***	−.183***	−.184***
配偶者との会話時間		.086*	.070**
家族観：子どもが3歳くらいまで母親は子育てに専念すべきだ			−.055*
*R*2乗値	.037	.041	.044

（*P<.05, **P<.01,***P<.001）

4.3 力に頼るしつけ、子どもへの共感を意識しないしつけを行うことに影響を及ぼす要因

以下、「無視することがよくある」「叩くことがよくある」「傷つくことをよく言う」について結果を述べる。

1)対象者の概要（表 5）

年齢別にみると、全体で 20 歳代はおらず、「叩くことがよくある」では、30 歳代が多かった（27 名、84.4%）。性別では「傷つくことを言う」に女性が多かった（13 名、72.2%）。本人学歴では、中学校と大学院はおらず、高校が「無視することがよくある」（8 名、73.3%）、「叩くことがよくある」（17 名、53.1%）、「傷つくことをよく言う」（11 名、61.1%）で多かった。就業状況では、仕事についているが「無視することがよくある」（11 名、73.3%）、「叩くことがよくある」（28 名、87.5%）、「傷つくことをよく言う」（13 名、72.2%）で多かった。職種では、農林水産職はおらず、管理的職業が「無視することがよくある」（1 名、6.7%）、「叩くことがよくある」（1 名、3.1%）、「傷つくことをよく言う」ではおらず、少なかった。本人収入では、1200 万円以上はおらず、金額ごとの割合には差がなかった。

2)家族観（表 6）

「無視することがよくある」では、性別分業「どちらかといえばそう思わない」(8 名 53.3%)、「そう思わない」（5 名、33.3%）が多かった。「叩くことがよくある」では性別役割「どちらかといえばそう思う」（9 名 28.1%）、「そう思う」（12 名、37.5%）が多かった。「傷つくことを言う」では、項目すべてにおいて、「そう思う」から「そう思わない」までの割合には差がなかった。

表5 不適切なしつけ行為対象者の概要と家族機能

	話しかけることない	無視するよくある	叩くよくある	閉じ込めるよくある	傷つくことを言うよくある	気持ちを理解することない
	N=2	N=15	N=32	N=5	N=18	N=11
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
性別						
男	1 (50.0)	6 (40.0)	13 (40.6)	2 (40.0)	5 (27.8)	6 (54.5)
女	1 (50.0)	9 (60.0)	19 (59.4)	3 (60.0)	13 (72.2)	5 (45.5)
年齢						
20歳代						
30歳代	1 (50.0)	11 (73.3)	27 (84.4)	3 (60.0)	11 (61.1)	4 (36.4)
40歳代	1 (50.0)	4 (26.7)	5 (15.6)	2 (40.0)	7 (38.9)	7 (63.6)
本人学歴						
高校	1 (50.0)	8 (53.3)	17 (53.1)	4 (80.0)	11 (61.1)	8 (72.7)
専門学校		3 (20.0)	8 (25.0)	1 (20.0)	2 (11.1)	1 (9.1)
短大・高専		1 (6.7)	3 (9.4)		2 (11.1)	1 (9.1)
大学	1 (50.0)	3 (20.0)	4 (12.5)		3 (16.7)	1 (9.1)
大学院						
就業状況						
ついている	2 (100.0)	11 (73.3)	28 (87.5)	5 (100.0)	13 (72.2)	9 (81.8)
休職中					1 (5.6)	
過去についていた		4 (26.7)	4 (12.5)		4 (22.2)	2 (18.2)
職種						
専門・技術系		2 (13.3)	7 (21.9)	1 (20.0)	2 (11.1)	2 (18.2)
管理的職業		1 (6.7)	1 (3.1)			
事務・営業	1 (50.0)	4 (26.7)	5 (15.6)		6 (33.3)	3 (27.3)
販売・サービス		5 (33.3)	8 (25.6)	3 (60.0)	2 (11.1)	2 (18.2)
技能・労務・作業	1 (50.0)	3 (20.0)	11 (34.4)	1 (20.0)	7 (38.9)	4 (36.4)
農林漁業職						
無回答					1 (5.6)	
本人収入						
¥0		2 (13.3)	5 (15.6)		3 (16.7)	1 (9.1)
～￥99万台	1 (50.0)	4 (26.7)	5 (15.6)	1 (20.0)	5 (27.8)	2 (18.2)
￥100万～￥299万台		4 (26.7)	10 (31.2)	2 (40.0)	1 (5.6)	3 (27.3)
￥300万～￥799万台	1 (50.0)	4 (26.7)	11 (34.4)	1 (20.0)	6 (33.4)	5 (45.5)
￥800～￥1199万台		1 (6.6)			1 (5.6)	
￥1200万～						
無回答			1 (3.1)	1 (20.0)	2 (11.1)	
会話時間						
30分未満	2 (100.0)	1 (6.7)	1 (3.1)	2 (40.0)	8 (44.4)	2 (18.2)
30分～1時間未満		6 (26.7)	8 (25.0)	1 (20.0)	5 (27.8)	4 (36.4)
1時間～1時間30分未満		1 (6.7)	15 (46.9)	1 (20.0)		2 (18.2)
1時間30分～2時間未満		1 (40.0)	4 (12.5)	1 (20.0)	2 (11.1)	1 (9.4)
2時間～2時間30分未満		1 (6.7)	2 (6.3)		1 (5.6)	
2時間30分～3時間未満		1 (6.7)	2 (6.3)			
3時間以上		2 (13.3)			2 (11.1)	4 (18.2)

表6 不適切なしつけ行為対象者の家族観

	話しかけることない	無視するよくある	叩くよくある	閉じ込めるよくある	傷つくことを言うよくある	気持ちを理解することない
	N=2	N=15	N=32	N=5	N=18	N=11
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである						
そう思う		1 (6.7)	4 (12.5)		1 (5.6)	2 (18.2)
どらかといえばそう思う	2 (100.0)	1 (6.7)	8 (25.0)		5 (27.8)	2 (18.2)
どちらかといえばそう思わない		8 (53.3)	8 (25.0)	3 (60.0)	7 (38.9)	3 (27.3)
そう思わない		5 (33.3)	12 (37.5)	2 (40.0)	5 (27.8)	4 (36.4)
子どもはが3歳くらいまでは母親は育児に専念すべきである						
そう思う		5 (33.3)	5 (15.6)	1 (20.0)	5 (27.8)	3 (27.3)
どらかといえばそう思う	1 (50.0)	3 (20.0)	13 (40.6)		6 (33.3)	2 (18.2)
どちらかといえばそう思わない		2 (13.3)	6 (18.8)	2 (40.0)	3 (16.7)	
そう思わない	1 (50.0)	5 (33.3)	8 (25.0)	2 (40.0)	4 (22.2)	6 (54.5)
家庭を(経済的に)養うのは男性も役割である						
そう思う		2 (13.3)	9 (28.1)	1 (20.0)	5 (27.8)	5 (45.5)
どらかといえばそう思う	2 (100.0)	2 (13.3)	12 (37.5)	1 (20.0)	7 (38.9)	3 (27.3)
どちらかといえばそう思わない		8 (53.3)	4 (12.5)	2 (40.0)	4 (22.2)	
そう思わない		3 (20.0)	7 (21.9)	1 (20.0)	2 (11.1)	3 (27.3)

3)夫婦関係の評価（表 7）

「無視することがよくある」「傷つくことをよく言う」では、項目すべてにおいて「そう思う」から「そう思わない」までの割合には差がなかった。「叩くことがよくある」では、項目すべてにおいて、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」、「かなり満足」「どちらかといえば満足」が多かった。

4)生活の評価（表 8）

「無視することがよくある」では、「家計の先行きについて不安を感じたこと」で「よくあった」（7 名、46.7%）が多かった。「叩くことがよくある」「傷つくことをよく言う」では、「何度もあった」から「まったくなかった」までの割合には差がなかった。

5)心身の健康状態（表 9）

健康状況は、「無視することがよくある」では、「たいへん良好」から「たいへん悪い」までの割合には差がなかった。「叩くことがよくある」「傷つくことをよく言う」では「まあ良好」（19 名、59.4%と 9 名、50.0%）が多かった。精神的な健康状況では、CES-D の得点は、「無視することがよくある」「叩くことがよくある」「傷つくことをよく言う」では点数の割合には差がなかった。

6)サポートネットワーク（表 10）

「無視することがよくある」「叩くことがよくある」「傷つくことをよく言う」では、「精神的、経済的、人手について困った時に頼れる機関・人がいる」と回答した者がほとんどであったが、「頼れる機関・人がいない」と回答した者はゼロではなかった。

表7 不適切なしつけ行為対象者の夫婦関係の評価

	話しかける ことない	無視する よくある	叩くよくある	閉じ込める よくある	傷つくこと を言う よくある	気持ちを理 解することない
	N=2	N=15	N=32	N=5	N=18	N=11
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
配偶者は、わたしの心配ごとや悩みごとを聞いてくれる						
あてはまる		3 (20.0)	9 (28.1)	2 (40.0)	6 (33.3)	6 (54.5)
どちらかといえばあてはまる	1 (50.0)	6 (40.0)	18 (56.3)	2 (40.0)	8 (44.4)	4 (36.4)
どちらかといえばあてはまらない		4 (26.7)	2 (6.3)		3 (16.7)	1 (9.1)
あてはまらない	1 (50.0)	2 (13.3)	3 (9.4)	1 (20.0)	1 (5.6)	
配偶者は、わたしの能力や努力を高く評価してくれる						
あてはまる		1 (6.7)	8 (25.0)	1 (20.0)	5 (27.8)	4 (36.4)
どちらかといえばあてはまる	1 (50.0)	8 (53.3)	16 (50.0)	3 (60.0)	5 (27.8)	5 (45.5)
どちらかといえばあてはまらない		4 (26.7)	3 (9.4)		4 (22.2)	1 (9.1)
あてはまらない	1 (50.0)	2 (13.3)	5 (15.6)	1 (20.0)	4 (22.2)	1 (9.1)
配偶者は、わたしに助言やアドバイスをしてくれる						
あてはまる		3 (20.0)	10 (31.3)	1 (20.0)	6 (33.3)	5 (45.5)
どちらかといえばあてはまる	1 (50.0)	4 (26.7)	14 (43.8)	3 (60.0)	6 (33.3)	4 (36.4)
どちらかといえばあてはまらない		5 (33.3)	5 (15.6)		4 (22.2)	1 (9.1)
あてはまらない	1 (50.0)	3 (20.0)	3 (9.4)	1 (20.0)	2 (11.1)	1 (9.1)
子育てに対する配偶者の取り組みについて						
かなり満足		1 (6.7)	9 (28.1)	2 (40.0)	6 (33.3)	4 (36.4)
どちらかといえば満足	1 (50.0)	7 (46.7)	15 (46.9)	1 (20.0)	6 (33.3)	4 (36.4)
どちらかといえば不満		5 (33.3)	4 (12.5)	2 (40.0)	5 (27.8)	
かなり不満	1 (50.0)	2 (13.3)	4 (12.5)		1 (5.6)	3 (27.3)
家事に対する配偶者の取り組みについて						
かなり満足		3 (20.0)	12 (37.5)	2 (40.0)	6 (33.3)	4 (36.4)
どちらかといえば満足	1 (50.0)	7 (46.7)	10 (31.3)		7 (38.9)	2 (18.2)
どちらかといえば不満		4 (26.7)	6 (18.8)	2 (40.0)	4 (22.2)	3 (27.3)
かなり不満	1 (50.0)	1 (6.7)	3 (9.4)	1 (20.0)	1 (5.6)	2 (18.2)
無回答			1 (3.1)			
夫婦関係全体について						
かなり満足		2 (13.3)	9 (28.1)	2 (40.0)	4 (22.2)	4 (36.4)
どちらかといえば満足	1 (50.0)	8 (53.3)	16 (50.0)	1 (20.0)	7 (38.9)	3 (27.3)
どちらかといえば不満		3 (20.0)	4 (12.5)		6 (33.3)	1 (9.1)
かなり不満	1 (50.0)	2 (13.3)	3 (9.4)	2 (40.0)	1 (5.6)	3 (27.3)

表8 不適切なしつけ行為対象者の生活の評価

	話しかける ことない	無視する よくある	叩くよくある	閉じ込める よくある	傷つくこと を言う よくある	気持ちを理 解すること ない
	N=2	N=15	N=32	N=5	N=18	N=11
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
生活全体について						
かなり満足			5 (15.6)		3 (16.7)	2 (18.2)
どちらかといえば満足	1 (50.0)	9 (60.0)	22 (68.8)	5 (100.0)	9 (50.0)	4 (36.4)
どちらかといえば不満	1 (50.0)	5 (33.3)	3 (9.4)		3 (16.7)	3 (27.3)
かなり不満		1 (6.7)	2 (6.3)		3 (16.7)	2 (18.2)
自分が家族に理解されていないと感じたこと						
何度もあった		2 (13.3)	4 (12.5)		4 (22.2)	
ときどきあった		3 (20.0)	7 (21.9)	1 (20.0)	5 (27.8)	3 (27.3)
ごくまれにあった	1 (50.0)	5 (33.3)	5 (15.6)	1 (20.0)	3 (16.7)	1 (9.1)
まったくなかった	1 (50.0)	5 (33.3)	16 (50.0)	3 (60.0)	6 (33.3)	7 (63.6)
家事・育児・介護などで負担が大きすぎると感じたこと						
何度もあった	1 (50.0)	3 (20.0)	2 (6.3)		3 (16.7)	
ときどきあった		5 (33.3)	4 (12.5)	1 (20.0)	3 (16.7)	3 (27.3)
ごくまれにあった		3 (20.0)	13 (40.6)		3 (16.7)	
まったくなかった	1 (50.0)	4 (26.7)	13 (40.6)	4 (80.0)	9 (50.0)	8 (72.2)
家計の先行きについて不安を感じたこと						
何度もあった	1 (50.0)	7 (46.7)	13 (40.6)	2 (40.0)	7 (38.9)	2 (18.2)
ときどきあった		3 (20.0)	3 (9.4)		3 (16.7)	5 (45.5)
ごくまれにあった		2 (13.3)	9 (28.1)	1 (20.0)	2 (11.1)	1 (9.1)
まったくなかった	1 (50.0)	3 (20.0)	7 (21.9)	2 (40.0)	6 (33.3)	3 (27.3)

表9 不適切なしつけ行為対象者の身体的・精神的健康状態

	話しかける ことない	無視する よくある	叩くよくある	閉じ込める よくある	傷つくこと を言う よくある	気持ちを理 解すること ない
	N=2	N=15	N=32	N=5	N=18	N=11
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
この1年間の健康状態						
たいへん良好		2 (13.3)	5 (15.6)	1 (20.0)	1 (5.6)	1 (9.1)
まあ良好	1 (50.0)	6 (40.0)	19 (59.4)	3 (60.0)	9 (50.0)	6 (54.5)
どちらともいえない	1 (50.0)	5 (33.3)	4 (12.5)	1 (20.0)	4 (22.2)	2 (18.2)
やや悪い		2 (13.3)	2 (6.3)		2 (11.1)	1 (9.1)
たいへん悪い			2 (6.3)		2 (11.1)	1 (9.1)
CES-D得点						
12～17	1 (50.0)	5 (33.3)	17 (53.1)	4 (80.0)	6 (33.3)	6 (54.5)
18～23		4 (26.7)	8 (25.0)	1 (20.0)	6 (33.3)	3 (27.3)
23～48	1 (50.0)	6 (40.0)	7 (21.9)		4 (22.2)	1 (9.1)
欠損値					2 (11.1)	1 (9.1)

表10 不適切なしつけ行為対象者のサポート状況

	話しかける ことない	無視する よくある	叩くよくある	閉じ込める よくある	傷つくこと を言う よくある	気持ちを理 解すること ない
	N=2	N=15	N=32	N=5	N=18	N=11
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
問題を抱えて落ち込んだり、混乱したとき						
誰もいない	0 (0.0)	1 (6.7)	2 (6.3)	1 (20.0)	1 (5.6)	2 (18.2)
頼る人・機関あり	2 (100.0)	14 (93.3)	30 (93.8)	4 (80.0)	17 (94.4)	9 (81.8)
急いでお金を借りなければいけないとき						
誰もいない	0 (0.0)	4 (26.7)	3 (9.4)	1 (20.0)	3 (16.7)	2 (18.2)
頼る人・機関あり	2 (100.0)	11 (73.3)	29 (90.6)	4 (80.0)	15 (83.3)	9 (81.8)
家族の誰かが病気や事故で、どうしても人手が必要なとき						
誰もいない	0 (0.0)	2 (13.3)	1 (3.1)	1 (20.0)	2 (11.1)	2 (18.2)
頼る人・機関あり	2 (100.0)	13 (86.7)	31 (96.9)	4 (80.0)	16 (88.9)	9 (81.8)

５．考察

5.1 しつけの様態に影響を与える要因について

「しつけの様態」と、「本人の年収」「性別分業、母親育児、性別役割という家族観」「精神的、金銭的、人手のサポートネットワーク」との間には相関はなかったが、相関のある他の項目との間には相関がみられた。また、重回帰分析の結果では「CES-D 得点」「配偶者との会話時間」「子どもが 3 歳くらいまで母親は子育てに専念すべきだ」という項目からなるモデルについて、R2 乗値から、しつけの様態を十分に説明できるものではなかった。

このことは、今回、独立変数とした項目は、家族、夫婦の関係性が中心であり、年齢、職種や、また収入のように夫婦の組み合わせの必要な項目を含んでいなかったということが考えられ、検討の必要がある。

また、子どもの年齢、発達段階によってもしつけは異なること、女性は抑うつ傾向が高いことから（稲葉 2001）、性別や子どもの年齢によって要因が異なることも考えられ、対象者の検討も必要である。

5.2「力に頼るしつけ、子どもへの共感を意識しないしつけを行う」に関することについて

今回、「話かけることがまったくない」2 名、「無視することがよくある」15 名、「叩くことがよくある」32 名、「閉じ込めることがよくある」5 名、「傷つくことを言うことがよくある」18 名、「気持ちを理解することがまったくない」11 名であった。1387 名のなかの割合からいえば少数であるが、不適切であると非難されかねないしつけの行為についての回答は、大規模な調査であることから得られた人数でもあり、貴重なデータである。

NFRJ03 での同様の項目について、「話かけることがまったくない」、「無視することがよ

くある」、「叩くことがよくある」、「閉じ込めることがよくある」、「傷つくことを言うことがよくある」、「気持ちを理解することがまったくない」と回答した者の全体に対する割合には大きな変化はなかった。また、上田ら（2008）が特定の地域ではあるが、約 10 年間の養育行動を比較した調査で、両年に差はなく 50～60％はしつけの方法として「叩く」行動をとっていると報告している。

これは、上田ら（2008）は、「子育ては世代間の価値の伝承であるとも言える」と述べているように、子育ては、養育者自身の生き方、自分自身が受けた療育行動を振り返り、取捨選択し、子どもの発達状況、生活の状況に合わせて調節して、伝達していくものであるということであろう。力に頼るしつけ、子どもへの共感を意識しないしつけを行う者は、自らもそのようなしつけを受けており、「その行為はしつけなのだ」と認識していると推測される。会話時間や、夫婦の関係性、生活の状況、心身の健康状態、サポートネットワークにおいて、特徴的な傾向はなかったことから、回答した対象者自身の認識のみならず夫婦間または家族全体が、しつけの共有した認識もっていると考えられる。

そこで、子育て支援のためにはしつけの様態という行為のみを捉えるのではなく、力に頼るしつけ、子どもへの共感を意識しないしつけを行う養育者の、しつけに対する養育者また家族全体の価値観や認識、状況を確認していくことが必要であり、さらには、行為に対する子どもの反応も調査ししつけの方法としての効果を検討し、養育者自身がそれに気が付き、しつけという行為に注意を払うことができ、行動を変容できるようになる支援を行うことが「子育て支援」であり、子どもを心身共に傷つけるような育児困難な状態の予防につながると考える。

[文献]

有本梓，2007，「児童虐待に対する保健師活動に関するレビュー」『日本地域看護学会誌』9(2): 37-45.

稲葉昭英，2001，「結婚とディストレス」『社会学評論』53(2): 69-83.

賀数いづみ，前田和子,上田礼子,安田由美,仲曽根美佐子，2009，「沖縄県離島における若年母親の養育行動－一般母親との比較－」『沖縄県立看護大学紀要』1: 15-23.

金谷光子・杉浦恵子，2006，「しつけと虐待の狭間－子育て講座に参加した母親へのアンケート調査を通して－」『母性衛生』47(1): 32-42.

西嶋真理子・大野美賀子・矢野知恵・井出彩子，2011，「1 歳 7 カ月児養育者における出生順位別からみたパートナーとの協力と養育状況の分析」『日本地域看護学会誌』13(2): 69-76.

岡本光代・山田和子，2010，「子ども虐待を含む虐待周辺用語の定義に関する文献検討」『和歌山県立医科大学保健看護学部紀要』6: 1-7.

上田礼子・安田由美・前田和子，2008，「離島における養育行動の時代差－子ども虐待予防の子育て環境構築の視点から－」『民族衛生』74(3): 99-113.

————，2009，「子ども虐待予防の新たなストラテジー」『医学書院』.

Characteristics of the Family Impact on Child Discipline

Takako YAMAGISHI 1)
Nami KOBAYASHI 2)
1) Graduate School of Nursing, Kitasato University
2) Faculty of Nursing, Kitasato University

Public health nurses ought to distinguish the risks of mal-discipline to prevent child abuse. Purpose of this paper is to report outcomes of the analysis that investigated the characteristics of the family impact on the ways of child discipline. Sample data derived from NFRJ08 (N=1387: Age: 28-47 years old, couple data with at least a child) were used to analyze.

As results of multiple regression analysis that six groups of variables: family functioning, concept of family, relationships as a couple, living situation, physical or mental health, and social network were set as dependent variables while the variables of the ways of child discipline as an independent variable, mental health (short form CES-D Scale) (<.01), time of conversation as a couple(<.001), and "Until three years old, child rearing should be done by mothers" were significant (<.05), though R^2 was very low. In addition, after scrutinizing co-relation among each variable of the way of child discipline, especially focusing on parent sample of responding mal-disciplines (shutting out, hitting, ignoring, etc.) there is no common characteristic among respondents while most of them answered that they have enough conversation as a couple, less stress, and social network.

The results suggest that the other variables such as beliefs about child discipline as a couple may be concerned as variables in further investigation. And as the way of discipline would be shared as a couple, there is no room to reconsider their way of discipline even though it is not desirable in common sense. Public health nurse should be aware of this kind of risks rather than only giving attention to affection of mothering.

Key words and phrases: the way of child discipline, child rearing, preventing mal-discipline